

みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第255号

発行者
茨城県学校長会
会長 内田 和子
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

新年度に備えて —我が校の課題— 危機管理体制の整備と学校安全の確保



目次

○表紙写真に寄せて……………	1
○特集1「新年度に備えて —我が校の課題—」……………	2
○特別寄稿「学びを人生や社会に 生かそうとする人材の育成」…	5
○特集2「危機管理体制の整備と 学校安全の確保」……………	6
○提言二題……………	8
○課題……………	9
○「教師の新たな学びの姿」……………	9
○研修報告「全連小・全日中」……………	10
○ブロック研修会から……………	12
○ひばり……………	13
○図書紹介……………	14
○梅のかおり……………	16
○市町村教育委員会と学校長会……………	16

縦と横のつながりを生かして

潮来・潮来第二中

根本 政世士

校訓「たくましく前進」のもと、
家庭・地域の絶大なご支援をい
ただき、教育活動を展開していま
す。今年度は、少子化や生徒の実
態から行事を見直し、体育祭、合
唱コンクール、クリーン作戦、い
じめ撲滅フォーラムで縦割り団活
動を取り入れました。学年・学級
という日常的な横のつながりと
もに、団活動による縦のつながり
も生かし、多様な考えに触れさせ
たり、リーダー性を育てたりする
ことで、将来にわたってたくまし
く前進していくための基礎を培い
ます。

特集
1

新年度に備えて —我が校の課題—

「あかるい」学校を目指して 「学びにあかるい・地域にあかるい・安全にあかるい」

笠間・岩間三小 佐々木 英治

ある日のこと、学校支援ボランティアの方が樹木の剪定作業を行いながら「岩間三小の校門をくぐれば希望が見える。」と話してくれた。校門脇には「希望」と彫られた石碑がある。それを指しての話かもしれないが、いい話に受け取った。

さて、本校はコミュニティ・スクールである。今年度一〇回の学校運営協議会を開催して、育てたい人財の共有化やコミュニティ・スクール推進のためのコミュニティづくり資料を作成した。小委員会の立ち上げや実働にも取り組んできた。「あかるい」学校を目指して新年度に向けて継続・推進していきたい。

一 学びにあかるい

コミュニティ・スクールを推進していくうえで、カリキュラム・マネジメントの確立は重要であると捉えている。キャリア教育を主軸に教科等横断的な視点で教育内容を組み立てる作業に取り組み、「なぜ、学ぶのか」を明らかにするとともに、授業の改善に取り組んでいきたいと考えている。

二 地域にあかるい

地域とともにある学校づくりを推進するために、学校運営協議会との協働作業に取り組んできた。育てたい人財像の共有化を広げ、「地域の子供は、地域で育てる」組織の具現化を充実させたい。活動を持続可能なものにするためのマネジメント機能について考える必要がある。

三 安全にあかるい

学校は、公共施設であり、安全・安心であることを忘れてはいけない。そのために、校内・

アントレプレナーシップの育成と 地域への感謝を示す

ひたちなか・美乃浜学園 朝比奈 泰浩

本校は三つの小学校、二つの中学校が統合し、昨年度、ひたちなか市で初の義務教育学校として開校した。組織目標を「一人一人が自分のよさを発揮し、認め高め合う集団づくり」として、教職員が一丸となって取り組んできた。次年度は、全職員で成果と課題を整理しながら、次のことに取り組んでいく。

一 アントレプレナーシップの育成
開校初年度は、特別活動を通

校外の体制づくりを地域とともに推進していくこと（関係機関との連携を含めて）と併せて、安全教育（危険を予知できる子、危険を避けることができる子）に地域ぐるみで取り組んでいきたい。



岩間三小 校門脇の「希望」

して、児童生徒同士の温かい人間関係の醸成に努めるとともに、主体的に学ぶための手段として、ICT活用を軸に研究を進めてきた。今年度は更に生活科・総合的な学習の時間を中核にした地域素材の教材化や、企業・人財との連携を通じたアントレプレナーシップの育成を目標とした。その中で効果的なICT活用を通して「自ら問いをもち、主体的に学ぶ姿の育

成」を目指した。次年度も「新しいことを学ぶスキル」を向上させ、生涯にわたって学び続けるスキルを育成していく。

二 地域とともにあり続ける学校づくり

本校の特色の一つとして、児童生徒の七割がひたちなか海浜鉄道を利用して登校している。地域には、多くの卒業生や支援してくださる団体があり、登下校において、地域の方々や保護者から見守り支援を受けている。そのような協力に対して、感謝の気持ちを伝えたいと考え、全国学校給食甲子園において日本一となった強みを生かして、保護者向けの給食試食会を実施した。今年度は、更に地域の方々に對しても試食会を設定し、学校の様子を見ていただく機会とした。次年度においても、感謝の気持ちを伝える取組を拡大して、地域とともにあり続ける学校づくりを進めていく。



6年生の代表による、アントレプレナーシップに係るコンテストでのプレゼンの様子

元氣と活力のある学校を目指して

高萩・秋山中 小池 洋一

本校は、茨城県の北東部、北茨城市と日立市の間にある海と山に囲まれた自然豊かで、古くは炭鉱の町として栄え、観光名所も数多く存在する高萩市の山側に位置し、まさに秋の山がとても魅力的な地域にあり、生徒数一五〇名の学校である。「明るく、健康で知性豊かな生徒の育成」を教育目標とし、全職員で知・徳・体の調和のとれた教育活動の展開に努めている。その現状を踏まえ、新年度は次の二点を学校の新たな課題と捉え重点的に取り組んでいきたい。

一 ICTを活用した授業

本年度、ICT機器を活用した授業実践をしてきた結果、生徒がどのような考え方をもっているのかを大型モニター画面に表示して、他の生徒の意見や感想を見比べ、クラス全体での共有、交流が日々の教科・領域の中で展開されている。

今後は、タブレット端末活用の日常化を推進し、校内のみならず、他校や大学、県内外の教育施設との遠隔学習を進め、他者の情報や考えを取り入れたり比較・検討したりしながら、考え

を深める活動を実現していく。

二 心の教育の充実

コロナ禍の中、不登校、人間関係のトラブルなど、生徒指導上の課題が増えている。そこで、学級活動、生徒会活動等を通して、仲間づくりや集団活動を推進し、人間関係を築く力を育成するとともに、各教科、特別活動等において、社会体験や奉仕活動、集団活動等を積極的に取り入れながら展開していく。

各課題の具体的な手立てを、職員から意見として吸い上げ、ボトムアップ的に研修していくことにより、共通理解、共通実践ができるよう、職員一丸となって課題改善に取り組んでいきたい。



タブレット端末を活用した協働的な学び

「みんなで作る みんなが つながる学校」を目指して

鉾田・大洋小 大川 行彦

本校は、鉾田市の南部に位置し、東は太平洋、西は北浦、大地では多くの野菜が栽培されるなど、水と緑に囲まれた風光明媚な場所にある。本年度、大洋中学校区の四校が統合された創立一年目の学校である。「みんなで作る みんながつながる大洋小」をスローガンに、児童、教職員、保護者、地域の人々で、基盤づくりに努めている。見えてきた課題は様々あるが、新年度は特に、次の点に力を入れた。

一 縦割り班活動の充実

現在、三六二名の児童が在籍している。本年度は統合一年目ということもあり、学年内での人間関係づくりに力を入れてきた。また、新型コロナウイルス拡大防止の観点から、他学年との交流があまりできなかった。そのため、高学年の児童がリーダー性を発揮する場面も少ない等の反省が挙げられた。そこで、新年度は縦割り班活動の充実を図れるように、三学期から組織づくりに着手する。清掃や遊び、学校行事など、様々な活動の中で、異学年同士の交流を通し、多様な仲間とのよりよい人間関

係づくりやリーダー性を発揮する力を高めていきたい。

二 地域とともにある学校

統合前は四つの小学校ごとに「地域の学校」として、保護者や地域との連携が密に行われていた。本年度も登下校の見守りや姿勢教室、読み聞かせ、陶芸教室など、継続して関わってくださる方々も多い。三学期にかけて、学校と保護者や地域の方々とが更に協力できることを

「幸せな学校」を目指して

牛久・下根中 立花 勝行

本校は、「幸せな学校」の構築を目指して生徒五六〇名、五〇名の職員で教育活動を展開している。「幸せな学校」とは、生徒は勿論、保護者・地域の方々、そして、本校の職員が幸せでいられる学校である。そのために、ラーニング・コミュニティとケアリング・コミュニティの構築を進めている。

一 ラーニング・コミュニティのさらなる深化を目指す

ラーニング・コミュニティは学び合う集団である。来年度も

調整する。そして、様々な大人たちと子供たちが交流を深める機会を増やししながら、大洋小学校が地域の学校として定着するためにも、学校が保護者や地域の方々と教育目標を共有し、子供たちがより安心して学べる環境づくりに取り組んでいく。



地元「遊友会」の皆さんによる陶芸教室

質の高い課題を提供するとともに、協働的な学びを中心に授業を展開し、一人残らず質の高い学びを保障することで生徒同士が学び合う集団づくりを目指したい。学び合う集団には職員も含まれる。働き方改革によって生み出された時間の多くを研修に充てている。特に授業研修では、生徒たちの学びを検証する。つまり、生徒の学びから職員も学び合うのである。来年度は、研修の省察の精度を上げること、より深化したラーニング・

コミュニティを構築したい。さらに、地域の方々と学び合う集団を構築したい。現在、学校運営協議会の方々が生徒たちを含めた地区ごとの避難訓練を計画している。避難訓練や防災訓練を地域の方々と生徒が一緒に行うことで、学校と地域が学び合う集団になると考える。

二 ケアリング・コミュニティのさらなる深化を目指す

ケアリング・コミュニティはリスベクトし合う集団である。これを形成するのも授業が中心となる。授業において、聴き合う関係を構築すること、グルー

プで高い壁（課題）を乗り越えることで生徒同士の人間関係を築き一人一人の居場所を作る。来年度は総合や特活に力を入れることでケアリング・コミュニティをさらに深化させたい。



質の高い課題にグループで挑戦する生徒たち

輝く個性が響き合い

笑顔あふれる学校づくり

つくば・前野小 村野 守司

緑豊かな筑波の台地で、地域に愛され、歴史と伝統を積み重ねてきた前野小学校には、一二八名の明るく元氣な子供たちが通っている。一四人の教職員も、それぞれの持ち味を発揮しながら、学校教育目標の達成に向けて励んでくれている。教員は若手が多く、専門職としての経験値はまだまだ浅い状況ではあるものの、明るく元氣な雰囲気をつくってくれている。学習指導、生徒指導、保護者対応、安全管理等々、教師の仕事は多岐に渡っ

ている。本校の教員に専門職として何を重視してもらおうのか、校長として判断に迫られている。そのような中で、新年度に備えるために我が校の課題を考え、最優先すべきは、教師の授業力の向上ではないかと強く感じている。個別最適な学びと協働的な学び、その往環の大切さは教員の研修でも同じではないだろうか。

個別最適な研修としては、教師個人がその時感じた自分に必要なものを自ら選択して学ぶ、

主体的な研修を重視したい。十分な時間を確保し、個人的な自己研鑽意欲を高めていくことが必要だ。先生たちを信じて、個人で使える時間づくりを大切にしている。

協働的な研修については、ひとつは職員室で聞き合いながら高め合える日常だ。そのために職員室の雰囲気づくりが欠かせない。もうひとつは全体で計画的に実施する校内研修だ。教師が成長への手応えを実感できる効果的な全体研修にしていく必要がある。

教師の個性に磨きをかけ、それぞれのよさを合わせてハーモニーを奏でる。笑顔あふれる職

学力向上と居心地のよい

学級・学校づくりを目指して

結城郡・八千代一中 小林 栄司

緑に囲まれた自然豊かで落ち着いた環境と、保護者や地域の協力体制が整った八千代第一中学校に着任し一年を終えようとしている。

今年度、学力向上や不登校の未然防止・解消に力を入れ取り組んできた。本年度の成果と課題を整理し、次年度は次の二点を重視し全職員で取り組んでいく。

一 学力向上に向けた取組
本校は人権教育を基盤にした

員室から、やがて教室へ、そして地域へと繋がっていく。そういう学校を目指して、校長の役割と大きな責任を背に、十分な時間の確保と雰囲気づくり、校内研修体制の構築に取り組んでいる。



校内研修で発表する新採教員

や放課後学習「やちスタ」の開設など、個々の生徒の学習支援の充実を図っていく。さらに、授業改善に向け、各種研修を開催し教員の指導力向上を図る。

二 居心地のよい学級・学校づくり

不登校やいじめなど、生徒指導上の課題がある。学級を基盤とし、生徒主体の学校行事や生徒会活動を通して、生徒一人一人が自分のよさを発揮できるようにする。また、自問清掃やあいさつなど、当たり前の質の向上を図り、生徒が誇りをもつことができるようする。

課題改善に向けた具体的な手立てを講じ、検証改善サイクルを重ね、組織的に取り組んでいく。そして、常に子供にどのような力が付いたのか、子供の姿で振り返ることを大切にしていく。今後も全職員一丸となって子供たちの豊かな学びや成長を全力で支えていく。



豊かな学び

特別寄稿



学びを人生や社会に 生かそうとする人材の育成

下妻市教育委員会教育長

中山 均

AIやロボティクス等先端技術が産業や社会生活へ導入されつつある中、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で社会のデジタル化やオンライン化が大きく進展しました。学校教育もその例外ではなく、オンライン教育に大きな注目が集まっています。が、社会全体のDXの加速の必要性が求められる中で、ICTは学校教育を支える基礎的なツールとして、必要不可欠なものになっていきます。このような状況にあつて、本市は早い段階に学校における一人一台端末と高速大容量通信ネットワークの整備を完了し、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、一人一人の資質・能力を一層確実に育成できる教育ICT環境を整備しています。

人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められています。

これらを達成するため、本市では令和三年十二月に第二次教育振興基本計画を改定しました。基本理念は、「学びを人生や社会に生かそうとする人材の育成」。前述したように、情報化やグローバル化といった社会的変化が加速度的に進展しています。このような社会的変化は、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、すべての子供たちの生き方に影響しますが、子供たちがこれらに主体的に対応できるようにするためには、知識や技能の習得だけでは不十分です。子供たちは、判断の根拠や理由を明確に示しながら、自分の考えを述べることができるようになることが大切です。また、学ぶことを自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、学習したことを生活

や社会の中の課題解決に生かしていけるようにすることも大切になってきます。そして、自分の判断や行動がよりよい社会づくりにつながるという意識をもたせることにより、一人一人が未来の創り手となることを願っています。

重点施策としての一つ目は、英語教育の充実です。小中学生を対象とする英語検定受検料補助や英語キャンプ、海外等とのオンライン英語交流を実施し、実際のコミュニケーションを体験しながら、楽しく英語力を高めています。また、ICTを活用して英語でプレゼンテーションを行うことができる児童生徒の育成を目指し、小中合同英語フォーラムを実施しています。

二つ目は、冒頭で述べたICT教育の充実です。市内小中学校に派遣しているICT支援員の拡充を図るとともに、ICT推進プロジェクトチームを立ち上げ、オンライン会議ツールを活用して、教員のICT活用指導力の向上を図っています。

三つ目は、不登校児童生徒への学びの支援の充実です。様々な事情により教室での授業に参加できない児童生徒に対しては、本人の状況や意向に寄り添いながら、一人一台端末を活用し、学びを支援しています。

笑顔満開の学校を目指して

猿島・境二中 内海 孝至

本校は、利根川の岸辺町である境町の南東に位置する全校生徒二〇一名の中学校である。今年度は組織目標「一人一人を大切にし、積極的にチャレンジする組織の醸成」のもと、生徒、教職員、保護者、地域が協働しながら、教育活動を進めている。次年度に向けては、成果と課題を整理して、次の二点を中心に改善のマネジメントを進めていく。

一 授業力向上に向けて

本年度は教師の授業力の向上については、教務主任、研究主任、情報教育主任が連携し、タブレットの効果的な活用について校内研修を進めてきた。その成果として、それぞれの教科の特性に応じてタブレットを活用する機会を促進したこと、ほとんどの生徒が、授業において学習用具として何不自由なくタブレットを使用している。今後とも研修を推進し、個別最適な学びと協働的な学びを実現するためのツールとしてのタブレットの効果的な活用を追究していく。

二 生徒主体の活動の促進

本校では現在、全生徒が落ち着いた態度で生活し、授業に取



英語の授業 タブレットで会話を録画

特集2

危機管理体制の整備と
学校安全の確保

生活安全と災害安全への取組

久慈・依上小 廣木 一博

一 はじめに

本校は、大子町の西北部に位置し、児童数六二名の小規模校である。周囲を山々に囲まれ、学校前には川が流れる自然豊かな環境である。学校安全の中でも「生活安全」については、赴任二年目の新しい視点で見直すように特に配慮している。また、地域の特徴から「災害安全」にも留意し取り組んでいる。

二 生活安全への取組

施設や環境の危険箇所等を教頭と洗い出し、改善を図った。

(一) 施設等の安全管理

四月に遊具に関係する事故が多数発生したため、遊具の安全管理を徹底した。

・週に一回以上の触診による固定状況の確認

・遊具周りの安全確保（立ち入り制限のロープ等の設置）
・休み時間の看護体制の強化
(二) 敷地内の環境整備

自然豊かな反面、危険な動植物が身近に存在している。

そこで、次のような対応を行った。

・目の高さにある樹木の枝打ち
・危険植物の除去（ウルシ等）
・ハチの巣の早期発見と駆除
・こまめな除草作業と古タイヤの処理（ヘビ対策）

(三) 各種マニュアルの見直し

国や県の通知文等から、最新の情報に基づき見直した。

・不審者侵入に対する対応

・熱中症への対応

・プール管理と水泳学習の対応
・心肺蘇生法の手順 など

三 災害安全への取組

東日本大震災や令和元年の台風十九号の被害等から災害に対応する教育を進めている。

(一) 水害に関する教育

本校は町唯一の浸水想定区域にある学校である。そこで初めて県の防災・危機管理課へ依頼し、川の氾濫時に避難するまでの「マイ・タイムライン」づくりを六年生対象に実施した。

(二) 中学校区連携引き渡し訓練

中学校区内の小中学校三校と保育園で連携し、災害時を想定した保護者への引き渡し訓練を継続して実施している。

四 おわりに

来年度から中学校区でのコミュニティ・スクールとなる。そこで、地域や中学校区内の学校との連携を強化し、地域と一体となって安全管理や安全教育

地域・関係機関と連携した
交通安全指導の推進

交通安全指導の推進

神栖・須田小 人見 泰典

本校は、PTA活動が盛んであり、保護者・地域の協力体制が整っている。それらを基盤とした上で、交通安全指導の充実を図っている。本校学区の道路状況は、碁盤の目のようになつており、交差点が多い。また、住宅地以外の地域では、歩道がない狭い道路があり、児童の登下校の交通事故防止が課題となっており、課題への対応として、地域や関係機関の皆様にもご協力いただいている。その実践の一端を紹介したい。

一 須田っ子を守る会の取組

須田っ子を守る会は、各行政区長を中心に会が設立され、今年度で十七年目になる。長年に渡り

に取り組んでいきたい。



マイ・タイムラインづくりの様子

地域安全活動への貢献が認められ、今年度茨城県警・茨城県防犯協会より表彰を受けている。

○登下校の交通安全指導

毎月一回、各行政区の交差点等で交通安全指導を実施していただいている。今年度は、守る会でたすきを作り、それを着用して行っている。二学期終業式の下校時にPTAと共に統一キャンペーンを行い、多くの方々にご協力いただいた。

○交通標語の校内掲示

各行政区より納入いただいた予算から交通標語の掲示物を作成し、校内に掲示をしている。標語は、全児童から募

集し、選考いただいている。標語を掲示することで、児童の交通安全への意識の高揚を図っている。

二 関係機関による交通安全教室の実施

神栖警察署・交通安全協会の方々に講師に引き、一・二年生は横断歩道の渡り方、三・六年生は自転車の安全な乗り方について、実技を交えて指導いただいた。子供たちは、毎日の登下校や休日等の外出時に直結する内容であり、一人一人が自分事として交通安全について意識の高揚を図ることができた。

三 おわりに

保護者や地域の皆様に支えられ、児童が元気に生活を送れていることに感謝したい。それに甘えることなく、今後も学校での指導を一層充実させるだけでなく、地域や保護者・関係機関と連携し、児童の交通安全指導の推進に努めていきたい。



須田っ子を守る会交通安全指導

自他の生命尊重を基盤とした安全能力の育成 —— 発達段階に応じた救命教育の推進 ——

つくば・荻崎第三小 岡野 知樹

心臓突然死は、いつでも、どこでも、誰にでも起こり得る。学校にもAEDが普及し、救命に対する理解と対応力が求められてきた。しかし、目の前で突然人が倒れるという不測の事態に直面した時、救命行動をとることは容易ではない。

県教委の学校教育指導方針では、令和三年度からAEDを含む心肺蘇生法に関する教育項目に、「教員による発達段階に応じた指導の工夫」が追加され、救命教育の一層の推進が求められている。

本校では、救命教育における具現化の手立てとして、緊急時に行動を起こせる人財育成に向け、「PUSHプロジェクト」（以下PJT）を活用した授業実践に取り組んでいる。PUSHには、「胸を押す・AEDのボタンを押す・あなた自身を押す」の意図が込められている。このPJTの学びは、心肺蘇生の知識やスキルの習得とともに、「自分に何ができるか」を考えることを通して、命を大切にする心を育むことをねらいとしている。



6年生・胸骨圧迫に挑戦の授業

県教委主催の講習会も毎年開催され、NPO法人いばらき救命教育・AEDPJT（立川法正理事長）を講師に指導法を学び、授業づくりに役立てている。また、同PJTに賛同する県内の教諭・養護教諭・看護師等が作成する発達段階に応じた学習指導案を参考に、校内研修・授業実践に努めている。

（実践例）

一年生（安全なのはどっち？）
二年生（生きている印を探せ）
三年生（救急車は、なぜ急ぐ）
四年生（AEDのなぞを解け）
五年生（倒れた人を救助、自分にできることを探れ）

水害をわすれない防災教育

常総市・水海道中・青木 昇

六年生（胸骨圧迫に挑戦）
一～四年生は学級活動での実践、五・六年生は発展的な学習として、つくばスタイル科（総合的な学習をベースとした市独自の教科）の中で、発信型問題解決学習に取り組み、保護者や地域に向けて提案・発信を行っている。

学校安全の確保は、一人一人の意識化・行動化が重要である。今後も、子供たちが自らの学びを深め、自他の生命尊重を基盤とした安全能力の育成が図れるよう努めていきたい。

平成二七年の九月、関東東北豪雨により、本市は、甚大な自然被害を受けました。鬼怒川の越水や堤防の一部決壊による水害で、直接被害を受けた学校や避難所になった学校があり、通常の生活を取り戻すまでには時間が必要でした。この教訓から、市内の小中学校では、自然災害（特に水害）を想定した防災学習を九月に行っています。水害を忘れることなく、被災地区の学校として、または避難所として、それぞれの地域に応じた対策を考えて進めているところです。

活動内容としては、災害発生が予想される前から生徒の行動を意識したマイ・タイムラインの作成、災害発生時や避難時におけるクロスロードによる防災ゲーム、避難所設営体験や段ボールベッド体験、自然災害を想定した引き渡し訓練や垂直避難訓練の実施等、学校ごとに自校化した防災学習に取り組んでいます。また、市防災教育委員会を設置し、毎年各学校の取組について情報を共有しています。防災学習の開催に当たり、講話やアドバイスを河川事務所、県や市の防災危機管理課、茨城大学の協力を得て実施しています。



防災学習・クロスロード

だが、現在は実施できていないのが残念でなりません。一斉防災学習の成果として、児童生徒の災害に対する意識の向上が確実に感じられることは、大変喜ばしいことです。一方で、水害の忌々しい記憶がよみがえってしまう児童生徒が少なくないことは、十分に配慮して実践していかなくてはならないことだと考えています。このような防災教育を通して、今後、教師・児童生徒が自分の命を守ることや他者のために冷静かつ的確に行動することができるとを目指しています。

今後も平成二七年の関東東北豪雨水害を風化させることなく、「自らの命は自ら守る」ことを意識させながら、学校における危機管理体制の構築と自然災害に備える意識啓発の向上に努めていきたいと考えています。

提言二題

P T A活動にあたり

古河市PTA連絡協議会

会長 岩淵 尚



令和四年度、古河市PTA連絡協議会の会長を務めさせていただきました。日頃より校長先生をはじめとする各学校関係者の皆様には、PTA活動に多大なるご理解とご協力をいただき、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

古河市PTA連絡協議会は、小学校二・三校、中学校九校、児童生徒数約一万人の保護者及び教職員で構成される大規模な組織であり会員は約八九〇〇名を数えます。

これまでの主な事業としては、年に三回の運営委員会、総会、県西地区指導者研修会への参加、古河市で開催される各種審議会・協議会への参画、子育てネットワークへの支援等を行って参りました。

しかし、令和元年度末から、

新型コロナウイルス感染症の影響で、計画されていた事業が中止となっていました。それでも、このような状況の中、感染症対策をすることで、オンラインや規模縮小等の方法を行いながら、少しずつこれまでの活動に戻そうと、努めて参りました。

令和四年度に関しても、コロナ禍での一年間であり、本来のPTAとしての機能を十分に発揮できない状況でありました。しかし、学校では、活動を制限された中であつても、子供たちが運動会や体育祭、文化祭、ボランティア活動などに励んでおりました。PTAとしても、除草作業や資源物回収、学校行事への参加などの活動を通して微力ながら子供たちの成長に携わることができました。子供たちの活躍する姿を間近で見ることが、一緒に活動する大切さを味わい、幸せを感じることができました。このような大切な時間を一人でも多くのPTA会員が過ごせる機会を作りたいと思ひました。

現在の状況としては、ほとんどの保護者が家庭内外で仕事をもち働いているため、時間的制

約が掛かり、PTA活動に多くの時間を費やすことが難しくなっています。また、少子化によりPTA会員数も年々減少しています。このような現況とともにコロナ禍における制限された中での工夫した活動を振り返り、今後、新しいPTA活動を模索していくことも重要ではないでしょうか。子供たちの健全な発達と、親として責任ある行動となるPTA活動を目指していくことが必要と考えます。

コロナ禍が続く中、なかなか本来の機能が発揮されず、不十分なPTA活動となつてしまつた一年間でした。しかし、これからの新しいPTA活動のよりよい形を会員皆で考えていき、子供たちが安心・安全に学校生活を送る支援ができる組織としていきたいと思ひます。

家庭、地域社会

茨城町PTA連絡協議会

会長 成田 満



茨城町PTA連絡協議会会長を務めさせていただいております。日頃より成田満と申します。PTA活動に

PTA活動に対しご理解とご協力をいただき、保護者を代表して感謝を申し上げます。

今年度は、感染拡大防止対策を徹底し、三年ぶりに指導者研修を開催できました。テーマは「学校、家庭、地域社会の連携を担うPTA活動の在り方」でした。学校が社会に対して閉鎖的であるという指摘はしばしば耳にするところであります。学校や地域によって事情は異なります、この指摘の是非を一律に断定すべきではありませんが、子供たちの育成は学校、家庭、地域社会との連携、協力なしには成し得ないと思ひます。

これからのPTA活動は、学校と家庭が教育について相互に理解を深め合い、充実に努めるとともに、地域における教育環境の改善を図ることが重要です。また、保護者と学校の協力のもとに組織され、子供たちの健やかな成長を願いつつ、地域の実態に応じた様々な活動を展開することが大切です。さらに、子供たちを取り巻く環境が著しく変化していく中で、家庭や地域社会の教育力を高めていくことも必要です。

PTA活動は、決して強制できるものではありません。それぞれの考え方もおありかと思ひます。しかし、子供たちに、より安全で楽しい環境をつくるためには不可欠だと考えます。

新型コロナウイルス感染症の拡大により、生活環境が大きく変化する中で、新たな課題が学校や地域で生まれています。今後のPTA活動も、新型コロナウイルスの感染拡大状況を意識しながら、知恵を出し合い、工夫しながら行っていく必要があります。PTA本来の目的を忘れず、個性豊かな子供たち一人一人が輝く瞬間をサポートしたいと思ひます。

また、今までもPTAの様々な活動が新型コロナウイルス感染症対策により縮小や中止になつてきました。そのような状況を打開するために、少しでも明るい方向に導くアイデアを出し合い、工夫していく必要があります。そのためには、今までにないデジタルツールを取り入れた活動を展開していくべきだと考えます。

子供たちの成長を願う先生、保護者、地域の方々が積み上げてきたからこそ、困難な状況の中でも、PTA活動を継続できたと思ひます。

子供たちの笑顔をつくるには保護者や教職員が笑顔を見せていくことが大切です。笑顔が絶やすことのないよう、今後も、皆さまと力を合わせ、協力しながら一生懸命活動していきたいと思ひます。

どうぞよろしく願ひいたします。

課 題



「教師の新たな学びの姿」

県学校長会副会長 茂木 政則

(行方・玉造小)

「教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律」によって、教員免許更新制が発展的に解消された。講座の予約や更新の申請手続きが確実にされているなどの心配がなくなり、ほっとした一瞬であった。しかし、「新たな教師の学びの姿」を実現する体制が構築されることになり、より確実に学びの契機と機会が提供されるよう、教育委員会における教師の研修履歴の記録の作成と当該履歴を活用した資質向上に関する指導・助言等の仕組みが導入されることになった。そして、所属教師の人材育成に大きな責任と役割を担っている校長に、教育委員会の御指導等をいただ

きながら、適切に研修を進めていくことについて、さらに責任が求められることになる。

令和四年八月三十一日に改正された「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」では、教師に共通的に求められる資質能力を①教職に必要な素

養、②学習指導、③生徒指導、④特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、⑤ICT教育や情報・教育データの活用、としている。

これら五つの柱を改めて見てみると、「なるほど」と頷ける。①から③は、これまでも全教師が力を入れてきたことである。④⑤については、時代の流れから「やはり」と思う。

令和四年十二月十三日「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」が発表された。知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒が、前回平成二四年調査結果の推定値六・五%を上回り、八・八%とされた。本校は、児童数四九七人であるが、通常学級十七学級に対し、特別支援学級七学級、通級指導教室二学級がある。次年度は、さらに特別支援学級を「学級開設しなければと考えている。二つの調査結果は、調査の方法上、単純比較することはできないだろうが、おそらくこの学校でも特別な教育的支援を必要とする子供の数は増加傾向にあり、全教師が対応できることの必要性を感じているのではないかと推察される。

「令和の日本型学校教育」を担う教師は、多様な専門性を有する質の高い教職員集団を形成することが求められる。これを行うためには養成・採用・研修ということになるが、学校を預かる私たち校長としては、研修をいかに充実させるかが課題となる。教師一人一人の「強みや専門性」をどのように高めていったらよいか、一人一人の教師が習得した内容を他の教師と対話等を通して学び合うなど、協働的な教師の学びをどのように進めていったらよいか等が重要な鍵となる。

本校では今年度、特別支援教育について、特別支援教育コーディネーターを中心に研修を行っている。コーディネーターは、これまでに校内外の研修で得た知識・技能等を全教師に伝え、授業研究では全教師が目標の達成につながる授業であったか協議を行っている。教師の「個別最適な学び」と「協働的な学び」に繋がると考えているが、往還による研修効果を含め、課題は多岐にわたる。

研 修 報 告

第七回全連小研究協議会島根大会に参加して

(オンデマンド)

ひたちなか市・中根小

皆川 修

全連小島根大会が、十月十四日実施された。コロナ禍の影響で島根会場と東京会場をオンラインで結ぶ開催となった。各分科会は、後日オンデマンド配信による視聴となった。これは、全国の学校長が参加でき、学びを止めない教育を実現したといえる。

私が視聴したのは、第九分科会の「命を守る安全教育・防災教育の推進」である。その視点は、自ら判断し行動できる子供を育てる取組、家庭や地域・関係機関との連携・協働を図った組織的・計画的な取組である。

北海道江差町と鳥取県岩美町の実践例から、校長の在り方が教職員の意識改革となり、地域・関係機関と共に行う防災教育に繋がっていた。子供たちへの防災教育は、日常生活の基本である下駄箱の靴揃えや教室の整理整頓が防災意識の第一歩となる取組から、自助・共助への意識を高める教育を目指していた。本県も地震や豪雨災害の経験から、防災意識を高める取組をしているが、地域と共にある防災教育を再確認すべきと感じた。

第七三回全日中札幌大会に参加して

日立・日高中

川野邊 和

十月十九日(二日)、北海道札幌市で第七三回全日本中学校長会研究協議会が開催されました。昨年の静岡大会に続くオンライン形式での開催でしたが、熱気あふれる大会となりました。

一日目の理事会・運営委員会に続き、二日目午前には文部科学省審議官の講話と、全日中及び代表地区である石川県からの提案発表、そして午後からは八分科会に分かれての研究協議が行われました。短い時間ではありましたが、全国の校長先生方と意見を交流できる貴重な機会となりました。

最終日には「アイヌ・アイト・プロジェクト」によるアイヌ民謡・舞踏が大会に華を添え、山口真由氏による記念講演で幕を閉じました。「日本に突き付けられる新たな規範『ポリティカル・コレクトネス』」というテーマでの講演は、多様性社会を生きる我々にとって進むべき方向性を考えさせる、示唆に富む内容でした。

大会運営に尽力された北海道中学校長会をはじめ関係の皆様へ感謝し、参加報告いたします。

ブロック研修会から

新しい時代を拓く、
心豊かな日本人の育成

水戸・第五中
久保 智佳子

今年度の中央ブロック校長研修会は、十一月十八日（金）教育プラザいばらきに講師の「氣象予報士お天気キャスター 小林正寿氏」をお迎えして、講演会を実施した。感染症予防対策のため、最少人数の参集とオンラインのハイブリッド方式での開催、また当日から二週間の配信をしたので、当日都合がつかない会員にも参加できる研修となった。

小林氏は、常陸大宮市出身で水戸市内の県立高校を卒業し、都内の大学へ進学、教員免許も取得し一時は高校教員を目指したが、少年時代のあることがきっかけで氣象予報士を目指すことを決めたということである。氣象予報士は合格率四・五%、その中でも東京のテレビで活躍しているのは四十人という狭き門なのだそう。実は高校時代、大学時代は大いに挫折を味わってきた小林氏。勉強する意義がわからなかったという経験からの猛勉強でもぎ取った資

新たな時代を拓く、
創意と工夫に満ちた学校経営

日立・助川中
田崎 喜広

今年度の県北ブロック学校長研究協議会は、九月六日（火）高萩市文化会館を会場に、講師として（株）プラスドライブ代表原マサヒコ様、来賓として茨城県県北教育事務所長平子剛之様をお迎えし開催された。

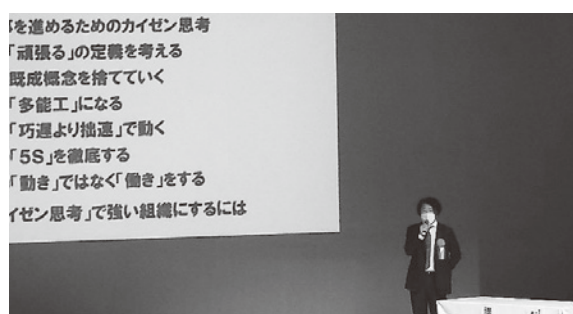
開会に先立って、四月の県北学校長会総会が紙面開催であったため、新会員十三名の紹介を自己紹介にて行った。

開会行事においては、ご来賓の茨城県県北教育事務所長平子剛之様よりご挨拶をいただき、県北管内における今日的な課題や県北学校長会会員への激励の言葉をいただいた。

その後の講演会では、（株）プラスドライブ代表原マサヒコ様より、演題「どんな業種にも当てはまる『仕事の秘策』は日本の製造現場にあった！トヨタ流カイゼンでまだまだ会社は強くなる」のもと、仕事を進めるためのカイゼン思考として六つのカテゴリーから示唆に富むご講演をいただいた。参加者からは「すぐに学校経営に活かせる内容でよかった。新しい視点から学校経営を見つめ直すよい機

会となった。」「学校関係者以外の講師の講演は、新鮮で興味深く、刺激があり学ぶべき要素がたくさんあった。」等の感想が寄せられた。また、「最近のリモートによる研修等が多かったので、対面で行うことで他市の校長先生方とも情報交換ができて大変有意義であった。」といった肯定的な意見が多く見られた。

結びに、コロナ禍において県北ブロック学校長研究協議会を全会員が一堂に会して実施できたことに、講師・来賓はもとより、献身的にご準備いただいた高萩市学校長会の皆様方及び参加された会員の皆様方に心より感謝申し上げたい。



講演会の様子

創意と活力に満ちた学校経営
「新しい時代の『人財』を
育成するために」

鹿嶋・鹿島中
原田 純一

今年度の県東ブロック学校長研修会は、八月二日（火）に神栖市文化センターを会場として、「創意と活力に満ちた学校経営」～新しい時代の『人財』を育成するために～をテーマに掲げて開催された。

はじめに、鹿行教育事務所長遠藤智幸様から、テーマに迫るための校長のマネジメント等について示唆に富むご講話をいただき、今後の具体的な方策等を考えることができた。

次に、茂木政則県副会長から県学校長会の情勢報告を受け、最新の情報と今後の活動の見通しを全会員で共有した。

後半は、E-Com Works株式会社代表取締役山本衣奈子様を講師としてお迎えし、演題「校長の言葉がもつと伝わるコミュニケーション術」～「伝える」から「伝わる」へ～についてご講演をいただいた。

昨今のコミュニケーションの変化についてご教示いただき、コミュニケーションの基本を再認識した後に、「伝える」と「伝わる」の違いを吟味し、「伝わる



演習を交えた講演の様子

るように伝える三つの「S」などについて、演習を交えながら楽しく和やかに学んだ。

また、「笑顔が生まれるような行動リストアップ」を意識することで、校長の思いや意図する内容が的確に伝わり、働き方改革や「人財」の育成の実現に有効であることが実感できるよい機会となった。

なお、協議は、後日、各市で実施して報告書にまとめた。

講師の先生方のご指導と会員の意欲的な研修態度によって、対面による有意義な研修会とすることができた。

働き方改革とリーダーシップ

土浦・土浦第一中
奥谷 克二

県南ブロック協議会研修会は、八月八日（月）、土浦市立

右槻小学校を配信校として、県南地区小・中・義務教育学校をオンラインにて結び、実施しました。講師の先生は、東レ経営

研究所の元社長で、株式会社佐々木常夫マネージメント・リ

サーチ代表取締役の佐々木常夫氏に、東京のご自身の会社より講話をしていただきました。

「働き方改革とリーダーシップ」という演題で講話をしていただき、管理職のリーダーシップや働き方改革、管理職自身の働き方等について考えを深めることができました。

佐々木先生ご自身の家族状況やそれに対応した働き方の見直しなど、苦境を乗り越った経験に基づく説得力のある講話でした。特に、企業経営者の立場から学校経営にアドバイスをしていただき、教員の立場では気づかなかった働き方改革のヒントを数多く得ることができたと思います。また、仕事の進め方の基本十箇か条を具体例を交えてお話ししていただき、今後の学校経営における働き方改革の参

考になりました。

更に後半は、「リーダーシップとは」「リーダーになるために必要な資質」について、ご自身の考えを熱く語っていただき、私達も改めて職責の重大さを再認識することができました。

小・中・義務の三名の校長より、若い教員個々の能力を引き出す育成方法や、部下のコミュニケーション力や、部下のコミュニケーションの特性を生かした双方向の研修を行うことができました。

各市町村校長会からの研修報告書では、「タイムマネジメントは時間の管理ではなく仕事の管理である。」「民間企業の方の話を聞くことは有意義だった。」「校長として、人を生かすマネジメントやリーダーシップは大

変参考になり実践していきたい。」「人生経験の豊富な先生の生き方、働き方、人となりに感動しました。」など、高評価な感想がたくさんありました。

新型コロナウイルス感染症が増えた時期でもあり、当初からオンラインでの講演会を予定し、参加できなかった校長や再度視聴したい校長に向けて、YouTube配信も行いました。参集しなくても効果的な研修会が実施されたと思います。

働き方改革を実現し、新しい時代の教育を推進する

下妻・千代川中
酒寄 亨一

県西ブロック学校長研修会は、十月十八日（火）に県西生涯学習センターで開催されました。県西地区の全校長が一堂に会しての研修会は実に三年ぶりで、待ちに待ったものとなりました。来賓として県西地区市町

教育長代表倉持利之様、県西教育事務所長石塚浩司様のご臨席を賜り、講師には一般社団法人ライフ&ワーク代表理事妹尾昌俊様をお招きし、「忙しいのは当たり前、児童生徒のためなら仕方がない」を見つめなおす『働き方を見つめなおす理由と方法』の演題でご講演いただきました。

講演に先立ち、研修会をより能動的なものとするために、「働き方改革」をテーマにした校長会代表者によるパネルディスカッションを行いました。これにより、各校の有効な実践を共有できたばかりでなく、働き方改革を進めていく上での課題について掘り下げて考えることができました。

講演では、「働き方改革」時短一辺倒ではない。真に大切なことにエネルギーと情熱をかけ

るために、どう時間を生み出すかだ。」との先生のお話に、大きくうなずく校長先生方が多く見られました。そして、教職員がどう時間を生み出していくかを主体的に考える校内研修の事例をお示しくださいました。今後、「教職員が主役の働き方改革」を進めていくにあたっての大きな示唆をいただけたと感じました。

結びに、コロナ禍にもかかわらず、県西地区の全学校長が顔をそろえての研修会が実施できましたこと、講師の妹尾先生や来賓の皆様はもとより参加された校長先生方に心より感謝申し上げます。



妹尾先生による講演

ひばり



無題
守谷・黒内小
荒井 弘勝

素晴らしきかな教職

小美玉・美野里中
皆川 修

現役最後の年となった。小学校も中学校も、単身赴任も、統廃合も、大規模校も経験できた。「子供たちの自立を支える」を信条に学校経営に当たってきた。校長室だよりを通して、保護者や地域の方々にも理解と協力を求めた。

今、教職人生を振り返ると、様々な困難もあったが、教職の道に進んでよかったと改めて思う。「人に教えることは学ぶこと」自ら学ぶ喜びを味わった。

「素晴らしい人との出会い」そ

れは、子供たちであり、仲間であり、保護者・地域の方々であった。「感動のある場面」心を揺さぶられる場面を数多く体験した。大きなイベントの時ばかりでなく、日常の日々の中にあつた。

今、教職を目指す若者が減っていることはとても残念なことである。教職を貫くためには、己自身の心を制御し、他者との良好な関係を築く術を身に付けていかなければならないゆえ、そうしたやすい道ではない。

それでも、教職という修練を通して、人生の充実感を味わうことができることは間違いない。多くの若者にこの道を歩んでほしい。

トリセツ 取扱説明書のない時代に

茨城町・葵小
浅野 尚子

「賃貸契約を更新せずに退去する。」と娘が言う。その部屋の片付けで残る疲労に、自身の齢を自覚する。ところで、娘は、結婚か何かを意識しているのだろうか。好奇心旺盛で真っ直ぐなのだが、完璧や我情がままならなくなった途端に混乱する娘。かつての定番ウエディングソングのように、彼女の取説を作るべきか迷う。折も折、ICT活用の協議をしながら、「今、取説つてないよね。」の声に驚いた。確かに。私は、若手や娘に訊き、ネット上の誰かの知恵に頼り、端末やスマホ、電子機器を扱う。アップデートによる改善や変更が続くのだから、書き換えられない取説は役立たない。

予測困難な未来の課題は、取説のような一つの方法で解決されないだろう。取説で完結することはない。変化がないなら、淘汰される。それならば、子供たちには、つまずきながらも、夢や高みを求め続けてほしい。

取扱説明書のない時代に生まれ育つ子供たちが、想像力をもつて幸せな未来を拓き続けるために、親として、教師として、残された時間で何ができるだろうか。

校長部屋にて

日立・大久保小
高野 都

柵の上には、セミの抜け殻、ハチの巣、超難度折紙のドラゴン、鉄道グッズ、シーグラスに石ころたち。窓際に並ぶ水槽には、メダカの影が朝日に煌めく。

ここには、実に様々な子供たちがやってくる。朝食代わりのラテを啜る子、自慢の作品を見せにくる子、得意の○○技で勝負を挑む子。各々好きな時間を過ごし、チャットだけエネルギーを充電していく。校長室というより校長部屋(?)である。

ここだけではない。保健室で心を落ち着かせる子。花植えを手伝って帰る子、別室で一教科だけリモート授業を受ける子。放課後、相談室に登校する子。

本校は「いつでも学校・どこでも教室・誰でも担任」。登校自体は目標ではない。学校を「生活を楽しみ学びを愉しみ、平和を紡ぐ一員として社会で自己実現を果たす力を育むための、かけがえない愛着の場所」にしてほしい。

持ち込まれた小さな宝物は、その子の分身、レジリエンス因子。「誰一人取り残すことなく、日々、子供を慈しんでいるか」を問う校長部屋の見張り役である。

シクラメンの花

鉢田・旭中
寺内 久永

校長室にシクラメンの花があります。この花は、昨年の冬に飾ったもので、今年も花を咲かせることができました。夏の間、水と肥料を与え、大切に育ててきました。これまで、二年目の花を咲かせたことがなかったのに、初めての経験となりました。シクラメンは、中央にたくさん花が咲く姿がきれいです。十一月頃、花芽が葉で隠れないように中央の葉を剪定しました。すると、花芽がまつすぐに伸びてきて、蕾をつけることができました。十二月には、ピンクの花が咲き始めました。自分がかけた花がともかわいらしく咲いたことは、ささやかな喜びとなりました。水や肥料を与えすぎたり、不足させたりせずに、少しずつ手入れしたことがきれいな花を咲かせることにつながったと思っています。

子供たちの好ましい成長においても、与えすぎることや不足させることにしっかりと気遣っていく必要があると思っています。将来、子供たちが美しい花を咲かせることができるよう、適切な関わりをしたいと思います。

「日常」に感謝

稲敷郡・大谷小

羽成 栄

私事、現任校への赴任以前、延べ七年間、行政勤務をさせていただきました。もちろん、日々の多忙さはどこでも同じですが、子供たちが元氣な声を響かせ、授業や行事を通して成長していく姿を、目の前で、肌で感じる事ができるのは、教員としてこの上ない喜びだと、改めて実感しています。子供たちと過ごす、この日常がとても幸せです。

先日、花壇の花苗の植え替えをしていると、多くの子供たちが率先して手伝ってくれました。「きれいな花だね」「大きく育つといいね」と、笑顔で語り合う表情を見て、何気ない日常の幸せと、その瞬間を共有できる感謝の思いが、より強く湧き上がりました。

弱い私は、うまくいかないとき、苦しいとき、悲観的になりがちです。それでも、下を向かず周りを見渡してみると、心が温かくなり、がんばろうと前向きになれることがあるものです。これからも日々、子供たちが安心・安全に過ごし、目の前の事象に感動できる穏やかな日常への感謝を忘れずに、学校教育を通して子供たちのために、尽力していきたいです。

教える子からの贈り物

北相馬郡・文小

友野 和也

夏休みのある日、来客の知らせを受け、職員玄関に向かうと青年が立っていた。顔を見て中学校での教える子の日だとすぐ分かった。

校長室に引き、楽しく近況報告を受けた。しばらくの雑談の後、Hはおもむろに鞆の中から封筒を出して言った。「先生は覚えていないかも知れませんが、高校三年生の時に先生から頂いた手紙です。僕はこれまで辛いことがあると、この手紙を読んで頑張ってきました。」Hの訪問理由が分かった。

汚い文字で、頑張りを繰り返す内容薄い手紙であった。これがその後のHを勇気づけていたとは、驚きとともに、たいへん有り難い思いに包まれた。

教師の魅力は教師の数だけあるかも知れない。私は「一人の人間の成長に微かに関われる喜び」が教師の魅力だと思っている。大きくではなく、微かにである。

Hは他県で同じ道を歩み日々奮闘しているという。教える子の二〇年ぶりの訪問という贈り物が、八月の風を心地よくしてくれた。

疾風に勁草を知る

筑西・嘉田生崎小

宮川 勉

「疾風に勁草を知る」とは、中国の古典『後漢書・王霸伝』の「疾風知勁草」に由来する。その意味は、激しい風が吹いてはじめて強い草を見分けられる。つまり、苦難にあつてはじめて、その強さが分かるということである。

令和元年度末からこれまではまさに、新型コロナウイルスの疾風が吹き荒れた時期。同時に、働き方改革や一人一台タブレット端末の活用など、学校には様々な課題が課せられた。そんななかで、自分は学校を導く者として「勁草」であり得たか。

本校での三年間は「今できる最善」を教職員・児童・保護者・地域の方々とともに求め続けたことに尽きる。今ある成果は、自身が「勁草」であったからではない。私たちの学校を守り高めようとして「今できる最善」をとともに尽くしてくれた、学校に関わる全ての人たちの協働・共生の賜物であり、それが今の本校の強みそのものだ。

きっと疾風に生き抜く勁草は、強くありながらも、柔軟かつ、しなやかであろう。自分自身も学校もそうでありたい。

やさしいことば

坂東・七郷小

荒木 久美子

「先生、何してたんだよお。」ある朝、父親の車から降りるなり、弾むように駆けてきた男の子が、私に声をかけた。

毎朝、正門に立って子供たちを迎えるのを日課としているが、わけあって正門に立つのをやめていた。この言葉は、そんな私へのお叱りの言葉だ。でも、その言葉と振る舞いはとても温かく心が和んだ。「おはよう」を交わす一瞬を大切に思っている子がいる。そのことに

気づき、胸がいっぱいになった。中学生と国語の授業で読んだ大岡信の「言葉の力」を思い出す。言葉はその人そのものである。その人の内面を映し出す。ひとつの言葉が単独で美しいのではなく、時と場と発する人によつて、言葉は美しくも優しくもなる。だから、決して雄弁である必要はなく、素直に思いを伝えられたらいいと思う。

「いつも大切なことを教えてくれてありがとうございます」そんな手紙をくれる子もいる。ささやかなやりとりの中、子供たちの優しい言葉に勇気と元氣をもらって過ごす毎日である。

読んでみませんか

「学問としての教育学」

著者 苦野 一徳

出版社 日本評論社

著者の苦野一徳氏は、気鋭の哲学者・教育学者として注目されている。本県でも教育研修センターの講師を務めている。工藤勇一氏との共著『子どもたちに民主主義を教えよう』では、話題を集め興味深かったが、苦野氏自身が重要な著作だと確信している本書を紹介したい。

苦野氏は、本書で、そもそも教育とは何なのか、どうあれば「よい」と言えるのかを洞察

している。そして、「よい教育」の実現に役立つ教育の研究はどうあるべきか、さらには、どうすれば有効な教育実践の理論や方法を開発することができのかについて、論を展開している。様々な教育課題に立ち向かうとき、我々は何を優先し、どのように考えればよいのか。本書はその手がかりを与えてくれる。

今後、苦野氏の講演等を、ぜひ聴いてみたいと思っている。

那珂市・第二中

岡部 正徳

梅のかおり

—先輩校長から—



自分の人生は自分流に

前・大子町立
依上小学校長
塚田 薫

「教師は学級経営と授業で給料をもらう」とご指導いただいた新規採用のときから、私の一番の楽しみは授業でした。管理職になってからも、必要とあらば喜んで授業をしてきました。それが、自分の背中を見せることにとなると信じて。

退職した現在、一般企業に役員として入社し、社会貢献事業を主な業務にしています。現在、そして近未来の社会に求められる人材の育成に貢献できるように、キャリア教育とSDGsを中心とした教育プログラムを作成し、全ての校種の学校・大学や企業に授業（講義）や講演、教育資料を提供しています。小学校から大学まで、児童生徒・

大学生と直接向き合う授業を行いながら、自分らしく生きていく幸せを感じています。

会社では、自分で勤務計画を立て、授業や講演の準備のほか、情報収集、学校や企業での事業説明など、自由に活動させていただいています。もちろん、社員に向けてのキャリア教育やSDGsを推進しつつ、本社の業務に少しでも貢献し利益につながるように努めています。お陰様で、自分流を貫いて働くことのできる喜びでいっぱいです。

教師の役割

前・水戸市立
第二中学校長
稲野 遼 親

退職後、大学で教員を目指す学生への授業や、教育実習に関する仕事に携わっております。

現在、教員という職業について様々な情報が逆風として吹いています。そうした中であっても、教員を目指して進学してきた学生に、教員の仕事の魅力を伝え、全員が志高く教採選考試験に臨んでほしいと強く願っています。から関わっています。

学生に教員志望の理由を聞くと、小中学生時の担任の先生の

話をしてくれました。自分が困っているときなどに先生に親身になって助けてもらった話です。

また、小さなことでも頑張ったことを褒めてもらい、気持ちが出る、自信がもてるようになった経験の話も多いです。そして、「自分も教師になって、お世話になった先生のように子供たちの力になりたい。」という語ります。日頃の先生方の子供への関わりが、間違いなく次の代を担う教員のなり手を生み出す源になっているのです。

校長先生方には、そうした役割を先生方が担っていることをお伝えいただきたく、併せて先生方が、豊かな気持ちで生き生きと子供と関わる職場づくりをお願いいたします。

気持ちにゆとりを

前・北茨城市立
大津小学校長
増田 晃

定年退職後、地元の天心記念五浦美術館で週四日、勤務させていただいています。

初めは、戸惑ってばかりでしたが、徐々に仕事の仕方を覚えていきました。五月に入り、仕事に慣れ、ゆとりが出てくると、

お客様の表情が少しずつ見えるようになってきました。絵画に接し、忙しい日常から離れ、ホッとしている方、熱心に絵画を見つめて研究している方、絵画に囲まれた空間を楽しんでいる方など様々ですが、幸せな時間を提供する仕事に携わっていることに喜びを感じています。

休日は、早朝に約八キロのウォーキングをしています。朝の陽ざし、雲の動き、空気の香り、鳥の声、木々や草花の色に移り変わりなど新鮮に感じます。現役時代もウォーキングをしていましたが、考え事ばかりで、景色に目が向くことが無かったように思います。

現役の際に、もっと気持ちにゆとりがあれば、子供たちや先生方の表情を見て、気付けることが多々あったのではないかと反省しています。ぜひ、働き方改革を実現し、校長先生方にはゆとりをもつて、学校経営に励んでほしいと願っています。

教員生活の終わりを迎えて

前・潮来市立
日の出中学校長
河嶋 賢一

退職後、その余韻に浸る間も

なく日本人学校に赴任するという目論見は、コロナの世界的流行により見事に外れた。

ハンブルグ日本人学校での一年目は、四月遅れで赴任後、コロナへの対応に追われた。

天然芝で覆われた正規のサッカー場が確保できる広さの校庭を始め、ドイツにおいては最高の施設・設備を誇る学校に優秀な子供たち、二年目の学校経営は充実しているかに見えた。

しかし、三年目にコロナが落ち着いた後の対応など大きな問題が噴出した。本校の経営母体である理事会との連携を深め、同僚の先生方の協力を得て、ここまで頑張ってきた。教育委員会の後ろ盾のない日本人学校においては、校長の権限も大きいが、しっかり運営していかないと日本以上に大きく崩れる。

時代の変化とともに、過去の成功体験が何の役にも立たないことを改めて感じ、自分の力量のなさを実感した。このことを第二の人生に活かしていきたい。自分の教員生活は今年度で終わりを迎えるが、四十年という長い間、支えていただいた歴任各学校の同僚や先輩の先生方と妻に衷心より感謝申し上げます。

子供の背景を



前・土浦市立
土浦小学校長
小島 勝則

令和四年三月三十一日をもって三八年間の教員生活を無事終えることができました。人生の一区切りがついた現在、自分なりに精一杯取り組んだ満足感と達成感を感じています。これまで、たくさんの方々に支えていただきこの日を迎えられること、感謝の気持ちで一杯です。

四月からは、市の福祉部署に勤務しております。子供たちが学校生活をスムーズに送ることができるよう、先生方や保護者、時には子供たち本人から相談を受け、アドバイスする仕事です。さて、現在は、疾病や貧困、虐待、ヤングケアラーなど、子供と家庭に関わる様々な問題が指摘されております。この仕事に携わり、こうした問題を抱える家庭、子供たちが多くと実感しております。

翻って、自分はこれまでこうした子供たちや家庭に対して果たして適切に対応できていたであろうか。ややもすると忙しい日々にかまけて、見逃していたのではないか、反省しております。

失敗を糧に



前・石岡市立
石岡中学校長
岩田 利美

す。学校では、忙しさの中にも心にゆとりをもつて、軸足をやや子供と家庭において接することが重要だと改めて感じる昨今です。

「失敗をどう乗り越えましたか？」ある会での問いかけに、改めて「失敗が自分を成長させてくれた」と深く「失敗」に感謝した。失敗から、教師としての覚悟ができ、思いが深くなった。特別支援教育に携わり、経験では解決できないことの数々から、教師としての在り方が大きく変わった。

「失敗」は、その時々我真摯に取り組んだり挑戦したりしたからこそその結果であると思う。だからこそ、やり直すことができる。大人も子供も。そして、失敗の中に、事の本質が隠されている。

先日、あるジャンソン・コンサートで聴いた「ケ・サラ」に強く心を打たれた。そう、もう一つ大事なことがあった。「なるようになる」と前を向く樂觀

性。

そして、何より、失敗の連続の私を支えてくれたのは、たくさん仲間と子供たちだった。

失敗は、プラスかマイナスか、新型コロナウイルスは、禍か創造のチャンスか。正解は、ない。それはきつと、それを経験する人の心の中にあるものだろう。

正解のない、コロナ禍といわれる状況が続いている。その中でも、皆様が、失敗を恐れず前を向き、学校づくりを楽しんでいかれることを、心から応援している。

子供や保護者の心に寄り添って



前・結城市立
絹川小学校長
町田 裕行

早いもので、退職してから一年が経とうとしています。現在は、尊敬できる先輩お二人と共に、相談業務をさせて頂いています。電話での相談が主で、相談される方は、小中高校生の保護者の方がほとんどです。顔は見えないにしても、退職後に直接、保護者の方と、しかも子供たちや保護者の方が苦しんでいる話をお聞きするのは、覚悟がいる事です。また、解決に向け

て話をしている常に、「これで良いのか？」という思いに立たされます。

そのような時に思い浮かぶのは、最後の赴任地の小学校で共に務めた先生方の姿です。放課後の廊下や玄関先で、保護者の方が納得するまで、真剣に、でも温かな表情で話を聞き、また話をしていました。保護者の方は、安心した様子で帰っていくのが常でした。また、子供たちの話を目線に合わせて、丁寧に聞いている先生方の姿もありました。

相談を聞かせて頂く者として、先生方の寄り添おうとする姿を思い浮かべ、子供たちや保護者の方々が安心してできるように、丁寧に時間をかけて相談業務を行っていきたいと思っています。

初心にかえり毎日に感謝



前・下妻市立
東中学校長
比企 明郎

この春、三八年の勤務を終えて定年退職することができました。これも、今まで支えてくれた家族や多くの皆様のおかげだと深く感謝しております。

現在小学校で特別支援学級担任として勤務しています。退職後は初心にかえり、教員として子供たちに関わりたかったからです。新任校での勤務は、当初戸惑いもありましたが、職場の仲間や子供たちとの関わりの中で軌道に乗り、現在はおかげさまで充実した毎日です。

ただ、苦労していることは苦手なICT活用の部分です。遠隔での授業、行事、研修等々、操作が不慣れで、今一番学ぶ必要を感じています。先月の授業公開では、近々の研修で学んだロイロノートの画面共有機能、話合いの場面に取り入れてみました。市ICT支援員さんに授業の構想を相談し、操作を学びながらでしたが。授業後、子供たちから肯定的な評価をもらえて、ほっとしました。正に六〇の手習いですがやって良かったです。

校長先生方におかれましては日々全力で学校経営に取り組まれていることと存じます。是非初心という、熱い思いを大切に、健康第一で活躍ください。



市町村教育委員会と学校長会

東 県

鉾田市教育委員会 との連携

鉾田・鉾田南小
宮内 芳孝

鉾田市学校長会は、小学校七校と中学校四校、県立附属中学校の十二校の学校長で構成されている。鉾田市では、「第三期鉾田市教育振興基本計画」が令和三年三月に策定され、「夢と希望をもち、未来を拓く心豊かな人づくり」を教育目標に掲げ四つの基本方針の実現に向けて取り組んでいる。毎月一回の定例会では、教育長をはじめ各課の担当者から指導助言を受け、研修や連絡調整を行っている。

一 鉾田市授業スタイル2ndの実践

児童生徒が学ぶことの意義を実感できる環境を整え、一人一人の資質・能力を伸ばせるようにするため、市内全小・中学校で授業力の向上を目指している。社会に開かれた教育課程の実現に向け、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を実践するため、授業スタイル2ndをもとに各

校が取組を進めている。「つかむ」「見通す・予想する」「考える」「交流する」「まとめる」「振り返る・生かす」のポイントが示されており、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。

二 効果的なICT活用のための支援体制の充実

一人一台端末を活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」を進めるため、学校規模に応じてICT支援員が定期的に派遣されている。授業支援や児童生徒の支援で教職員の業務改善に繋がっている。さらに校長経験者がICT指導員と派遣され、教師の授業改善とICT活用力の両面でのサポートを受けられる体制ができています。特にデジタル教科書の活用についてのアドバイスやAI型ドリルの利活用の支援が手厚い。

三 市教委と連携した働き方改革の推進

働き方改革は、学校の取組だけでは改善できない部分がある。中学校の部活動の地域移行をはじめとして、市教委と学校の連携を密にすることが重要となってくる。

今年度、市教委の各課と校長

南 県

つくば市教育委員 会との連携

つくば・東小
横田 康浩

会代表による「行政と学校の連携による働き方改革」を目指した協議を実施することができた。行政と学校それぞれの立場からの意見交換を通して、実現に向けて協議する場となった。行政上すぐに変更できないこともあるが、着実に改革に向けて動き始めることができた。今後定期的に協議をする場を設定していきたい。

つくば市学校長会は、小学校二九校、中学校十二校、義務教育学校四校の計四五校で構成されている。校長会定例会・研修会は年間七回設定されており、教育長、学校教育審議監、学び推進課長等から助言・指導を毎回いただき、共通理解のもと学校運営に取り組んでいる。

一 つくば市教育大綱実現のために

つくば市では令和二年三月につくば市の教育の根幹となる、

「つくば市教育大綱」を策定した。その目標として設定された「一人ひとりが幸せな人生を送るために」を実現するため、「教えから学びへ」「管理から自己決定へ」「認知能力偏重から非認知能力の再認識へ」の転換をキーワードに、教育活動を進めている。

教育大綱を実現するための具体的な施策等については、校長会定例会で教育長、学び推進課長に毎回ご指導いただいております。四五校が共通認識しながら実践することができている。

二 「教えから学びへ」の授業改善

つくば市の学校教育指導方針では、「教える教師」から「学びを引き出す教師」の転換を目指して、授業改善のための具体的な手立てが示されている。また、授業チェックシートで授業の中での改善すべき点が自己評価できるようにしている。市からの訪問指導では、具体的に示されたこれらの手立てについてのご指導をいただくため、課題を把握して改善に生かしやすいなっている。

三 「管理から自己決定へ」の取組の一つとしてのルールメイキング

ルールメイキングは、学校のきまりを児童生徒自身が見直し決定していく取組である。今回

は市全体としての初めての取組であったため、校長会、教頭会、教務主任会でプロジェクトチームを立ち上げ、校長会研修会でも学び推進課のご指導を仰ぎながら各校で実践を重ねた。市のプレゼンテーションコンテストでは素晴らしい実践が発表され、各校で共有することができた。

以上、つくば市教育委員会と学校長会は、明確な目標を共有しながら教育大綱実現のための実践を重ねている。今後も目標実現のため、教育委員会と校長会で連携を図っていきたい。

編集後記

皆様のお陰をもちまして、令和四年度の広報誌を無事に発行することができました。本年度は各学校の創意工夫の下、コロナ禍以前の教育活動を取り戻してまいりました。しかし、なお予断を許さない日々が続きます。執筆者の皆様からいただいた貴重なご意見を参考にさせていただきます。子供たちに充実した学校生活を届けられるよう、尽力してまいりたいと思います。

ご多用の中、原稿をお寄せくださった皆様に、心より感謝申し上げます。

(田村)